

「夢」はいつか訪れる

校長 玉田 絹夫

インフルエンザの心配をしていた寒さの時期も峠を越えて、先日は田舎でフキノトウを見かけ、春の息吹を感じられる頃となりました。本年度も後1ヶ月となり、学校ではまとめの学習や新年度に向けた心の準備をしていく頃となっております。

私は、「夢」が好きです。いつも3月になるこの時期に、私をここへ導いてくれた「夢」のことを考えます。今の私は「夢」のおかげであるんだと。だけど、「最近、夢のない若者が増えた。」「将来なりたいものは、特にない。」といったことが、小学生から大学生までの世代に多いと言われるようになってきました。小学校の校長として、「そうではないんだよ。どの子にも必ず『夢』をつかむ瞬間が訪れる。」と伝えていきたいと思っています。

私は、兵庫県多可町の田んぼの中で育ちました。子どもの頃は、テレビが隣の家にありましたがあまり見たいとも思わず、本も家に全くなくて読んだこともなく、とにかく野山で遊び、川で魚を捕り、田んぼで走り回っていました。現在の理科好きの原点はたぶんここにあったのだと思います。また、運動は苦手で、算数が得意ではありましたが、遊ぶことが一番でした。そんな私でも、6年生の卒業文集には「国際連合の本部長になりたい」と書いています。「夢」は大きく持っていたのです。今となってはどうしてそう考えたのかは忘れてしまいましたが、ちょうど6年生でそのような勉強をしたためかなと思います。そして、中学生の頃は、自分を少しでも変えようと苦手な運動系の部活動に打ち込み、卒業する頃には、中学校の部活の先生になりたいと考えておりました。高校では、「研究したり作ったりもいいかな。やっぱり数学の先生もいいな。」と揺れ動いていました。両方を大学受験して、結局、工学系学部に入りました。でも、2年してどうしても先生になりたいとの「夢」が強くなり、途中で教育学部へと転学部しました。就職の時には、中学校の理科の先生を第1志望に考えていましたが、数年したら中学校へ代わろうと考えて、とにかく先生に早くなりたかったので、少し門戸の広がった小学校の先生で採用されました。いざ小学校の先生になってみると楽しくてしょうがない。こんな未熟な私でも子どもは慕ってくれ、一緒に悩み・喜び・楽しんでくれる。自分もそんな子どもたちと一緒にいることが楽しく、共に成長できることが嬉しかったので、2年目には小学校の先生が自分の目指していた「夢」だったんだと思うようになりました。その結果、子どもには理科の時の先生の目の色が違うとよく言われていました。

私のように、「夢」は時に大きく、また変わってもいいし、迷ってもいい、つかんだなんて思わなくてもいいと思います。現在の小学生を含む若者は「夢が持てない」ではなく、「夢に気づかない」だけかもしれないし、「夢に出会っていない」だけかもしれません。「『ぼくには夢がない。』と思わなくていいから、いい『夢』に出会うための人生の助走路にいるのがきみたち小学生だよ。」と言ってあげることが大切ではないでしょうか。私たち教師も保護者も一緒になって、子どもたちの前にいろんな種を蒔き、いろんな物事を見させ、いろんな経験をさせ、いろんな挑戦や振り返りをさせることで、子どもたちが「夢」を捜す旅の手助けをすることができるのではないのでしょうか。残り1ヶ月も、子どもたちに「夢」をもらいながら、未来ある子どもたちの大きな「夢をつかむ」の第一歩の手助けとなれるように取り組んでいきたいと考えています。子どもたちの明るい未来の「夢」ために、今後とも、ご協力をよろしく申し上げます。